

郷

こうる

流

第 59 号 2009 年 3 月 10 日 発行



香盒

(漆作家 東日出夫作)



彼岸会(3月17日(火)〜23日(月))
彼岸会合同法要3月20日
午前11時から
法話 住職
西光寺の御門徒すべてが対象です。
本堂でいっしょにお参りしてから墓
参りましたしょう。

故人を偲び、仏法を聞く 彼岸

3月20日午前11時から 彼岸会合同法要 法話 住職
どなたも本堂にお参りし、お焼香をお願いします。

舍利弗よ。かの国土をなにかゆえに名づけて極楽となすや。その国の衆生は、もろもろの苦しみあることなく、ただもろもろの楽しみを受く。ゆえにその仏国土を極楽と名づく。 仏説阿弥陀經

「彼岸」とは、梵語（サンスクリット語）の Paramita（パラミター）を「波羅蜜多」と音写して、「到彼岸」（かの岸に到る）と漢訳された仏教語です。この世である此岸に対して悟りの世界である涅槃寂靜の世界世界をいいます。しかし岸という字が当てられているように、涅槃の岸辺、すなわち此岸と彼岸の境界でもありません。

春分の日や、秋分の日を中心に前後7日間がお彼岸の期間ですが、その間お寺へ出向いてお墓参りをする風習は、インドや中国にはなく、我が国へ仏教が伝えられて間もない頃から広く取り入れられた仏教行事です。日本人の国民生活にとけ込んだ行事となったのは、四季の移り変わりを敏感に感じ取る日本人独特の感性が育んだ風習といえます。

太陽が真東から昇り、真西へ沈むお彼岸のお中日は、夕日が西方浄土へ通じる道しるべとなって、お浄土に住む

有縁の亡き方を思い起こさせ、生かされて生きていることへの感謝の念を生じさせます。その大悲に通じる美しい感性を大切にすべきだと思っています。

昨年秋からの金融不安、实体经济の急激な落ち込みからの経済危機は、もつともつと地獄・餓鬼・畜生の三悪趣の餓鬼道（貪り世界）が剥き出しになつていられることをはつきり表していることと写ります。すでに、与えられてあることを気づかない私たちの在りようを仏教では無明といい、キリスト教では原罪というのだと思います。理性を否定することはできませんが、理性の横暴が世界を覆っています。理性を超えた叫びに謙虚でありたい。金融という道具が今では世界を支配し、その人間の生み出した道具が人間を奴隷にしています。

いよいよ道理としての仏法を忘れてはならないと思います。

お知らせ

すでにお知らせの通り、来る5月24日(日)は西光寺永代経法要ですが、今年は特に、江戸の地に西光寺が創建されて、400年目をむかえたことを記念しての法要を兼ねてお勤めいたします。

また、私たちの宗祖であります親鸞聖人の750回御遠忌を二年後にひかえ、その「お待ち受け法要」をも併せてお勤めするということを役員さんからご提案いただき、三つのご法要を兼ねいたします。

私たちの先祖が、人と生まれた事の意義と生きるよろこび、そのことを明らかにされた親鸞聖人の教えを聞いていくことをおして、私の人生が、ただ時が空しく過ぎ去っただけではないのだと、真正面から受けとめ、その教えを伝える道場として、西光寺を江戸幕府ができて間もない慶長13年に建

立いたしました。

このことの意味はとても大きな内容を持つています。教えは紙に書いてあるものを読めばわかるというものではなく、具体的な人の上に生きてはたらいています。私に先立って教えを受けただ多くの人、それは私たちの先祖です。多くの縁あるはたらきが、400年後の私にバトンを手渡してくださっているということだからです。先達の苦労も、ああ、そう、と聞けば単なるお話しです。仏法は私一人と受けとめます。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。」の言葉は、自分だけ特別ということではなく、私一人を目覚めしめんがためという驚き、はじめて気がついたと言うことでしょう。

この事実を大切にしていきたいと思えます。

後日、返信用の葉書を同封し、あらためて案内状を発送いたします。

お待ち受けの一環として 講座と本山参拝

前回、今回同封いたしましたチラシのとおり、御遠忌に合わせて「親鸞聖人に人生を学ぶ講座」を6月17日(水)から始めます。なにを抛り所にして私の人生を生きていくのか、一緒に尋ねていきたいと思えます。

共に聞いて下さる方を募集しています。

また、2011年5月24、25日は、皆さんのお力で御修復なった東本願寺での御遠忌法要に参拝します。美しい姿を取り戻した本山を直接ごらんいただきますとともに、ホテルでの夕食会には、アカデミー賞受賞作映画「おくりびと」の原作者であります青木新門さんをお呼びして、お話しをお聞かせいただくことが決定しています。

今からご予定いただき、50年に一度の大切なご法要にぜひ一緒に参りましょう。西光寺の枠は15名です。

光明土・海味

表紙の写真は、逗子にお住まいで、漆作家として活躍され、各方面からも高い評価をされているご門徒の東日出夫さんの作品です。このすてきな香盒（お香の入れ物）を親鸞聖人750回御遠忌の記念にぜひ納めたいと、2年の歳月をかけて作成し、御寄進下さいました。

以前から、本堂でお参りされていて、香卓の香盒が傷んでいること目にされ、思い立たれたそうです。「私はもともと鎌倉彫からスタートしたのですよ」と笑顔で言われる意味が、その時はわかりませんでした。これまで本堂で皆さんにお焼香いただく卓に置いてある香盒は、鎌倉彫の香盒だったのです。掃除の時磨きながら、そういえば、本山の紋が入った通常の香盒ではないなどは、思っていました。鎌倉彫だとは気がつきませんでした。ものを知らないとはそういうことですね。

お仕事柄仏具等を見る視線は鋭く、数年前から、ご門徒の皆さまの尊いお志で、修復してまいりました西光寺の本堂を見られて、東さんらしい表現ですが「かっこい

いですね」と言って下さいました。漆というのは本当に手間のかかるもので、しかし、手をかければかけただけの艶といいますか、質感が出るのだそうです。皆さまの深い願いにより、創建400年をきつかけとして、立派な修復ができたことをあらためて、文字通り有り難いご縁として受けとめさせて頂きました。



東さんご夫妻より香盒を受け取る住職

東本願寺の至宝展

親鸞聖人七百五十回御遠忌を記念して、東本願寺に伝来する美術品・文献等を展示いたします。狩野元信や円山応挙など、日

本の美術史に名を残す画家たちの秀作をはじめとする多彩な美術品や、幕末史に関連する史料の多くは、今回が初公開となるものです。4度の焼失をのり超えて伝えられてきた宝物等を通じて、東本願寺の歩みと、激動の歴史にふれていただきたいと思います。

高島屋・日本橋店）3月18日（水）～3月30日ご希望の方には招待券を差し上げます。

お声をかけてください。（先着100枚）



西光寺報恩講

2008年11月3日

三橋尚伸先生法話

年末にその年一年間を表す漢字一文
字というのが発表になりますが、去年

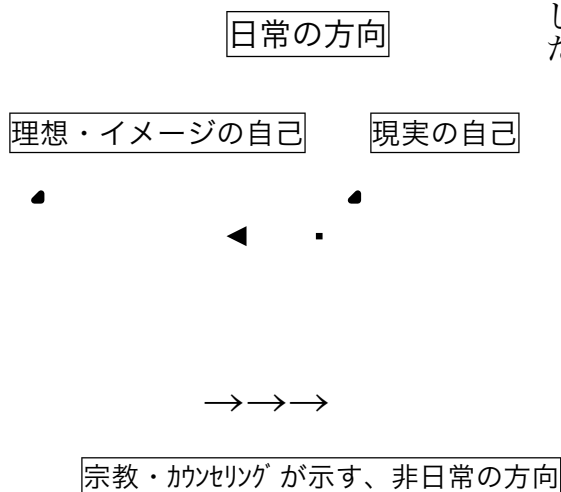
(2007)は偽装の「偽」でした。偽装
問題のニュースを見てどう思っている
でしょうか。多くの人は、一部の悪人
が偽装するのであって、私はやらない、
私は大丈夫だろうと思うでしょう。清
らかに、悪いことしないように生きよ
うと頑張つていらつしやると思います
から、まさか偽装する方にはならない
と思つてらつしやると思います。

ただし、「偽」という字の成り立ちを
考えてみると「偽」とは「人の為」と
書きます。人の為に何かをする、子ど
もの為、夫の為、友人の為、他者の為
にする行いはすべて「偽り」という字
になります。あるいは、「人の行為」そ
のものも「偽り」という字になつてし
まいます。私たちも含めて、すべて人
間の行う行為は「偽り」となつてしま
う。つまり一部の悪い人が偽っている

わけではなく、私たちもその中に含ま
れているということなのです。おそろ
しいことですが、これが事実だとい
うことを、これから皆さんと一緒に考
えていきたいと思えます。

偽りは他人事？

「私はやっていない」ときつとみん
な思っていると思えます。ただ漢字の
成り立ちがそうなっているだけで「私
はやらないよ」と自信を持つてゐる方は
多勢いらつしやると思えます。この図
を見てください。日常から見た私たち
の在り方を簡単な図にしてみました。



わかりにくいですが、左側の円(○)《理
想・イメージの自己》これは「私」と
いうものをこう見てほしい、こう感じ
てほしいという自分の理想像です。人
にこう見られたい理想の「私」。或いは
「イメージの私」。事実でなく「イメー
ジした私」こちらの方を真実だとして
日常を生きています。

右の円(○)は身が証している事
実です。これが私の実態、実像の私だ
と思つて下さい。日々私たちは朝から
晩まで世間を生きています。そうする
と私たちは左の円(○)ばかり力を入
れようとしてしまいます。親もそれを願う、学
校の教育もこれを願う、社会もこれを
願う。私たち日本人の大好きな「努力」
「がんばる」は全部この図でいうと左
の円に向かつてです。事実右の円だ
が、頑張つて努力して、「私の理想のあ
なたになりなさい」「親の私が求めるこ
んないい子になってください」等、方
向性は全部左側です。

イメージの私を私と思ひ込む

これは実態ではなく、理想でありイ

メージです。テストで子どもが50点を取ったとします、親はなんて言うでしょうか？たいいていの親は「こんなじゃ駄目だ」100点を取るように頑張らなさい。努力しなさいとお尻に火をつけます。そのように努力しないと、愛されないのを知っているから子どもは頑張ります。

では努力が理想通りの結果を出せたときに満足するだろうか。頑張つて100点を取れたとする。それで親は満足してくれるだろうか。答えはノー。今度は次の欲が出てくるのです。「100点で満足していたらだめ」と言われるのです。子どもは愛されたいから、認めて欲しいから頑張ります。もしかして努力の成果があつてクラスの一番になつたとして、それで親は満足してくれただろうか。さらに次の欲が出てきます「クラス一番で満足してはだめ、学年で一番になりなさい」。「もつと、もつと」、いつもこの言葉です。結果出せてさえそうです、出せなかつたときどうなりますか。ここで失敗してしまつた人、頑張りが間に合わなくなつた人、頑張るのに疲れてしまつ

て止まつてしまつた人、理想の自分に一直線にいけなくなつた人が「もう生きていくのに疲れてしまつた」と、心療内科を受診したり、私のところでカウンセリングを受けたりするのです。

理想の自分になれない苦しみ

私が関わっている一番年少の相談者は4歳です。さすがに4歳だと「生きているのに疲れてしまつた」と言葉には出せませんから行動で出していきます。髪の毛を鋏でジョキジョキに切つたり懸命に抵抗してメッサージを出そうとしています。7、8歳になるとはつきり言葉で出しています。「私は生きていちゃいけないんだね」と相談にきます。

いつも世間とか日常の方向を目指して努力を続けていると疲れて

しまうのです。なぜなら完璧な自分のイメージ通りになれないのですから。そしてそんな人生に疲れた人は、生ま



れてきたことを恨み始める「こんなだつたら生まれてこなければよかつた」という言葉まで発します。とても不幸です。

でも世間では理想の方向を目指すことを善しとしますから、頑張っている人をととても評価してくれるのです。それに応えようとしてもつと頑張り、さらに疲れてしまう。しかし、本当の私は右の円(○)にいます。実態、身が表している事実。わかつてはいるけど、そうはできない私がいるわけです。

身の事実立つ

この事実をはつきり言えば、努力が間に合わないような身をもって生まれてしまつたということ。私たちは努力して死なない身になれるか？歳をとらないでいることができるだろうか。努力は最初から間に合わないのです。それが私たちの実態です。

死ぬんです。いつでも、きつかけがあれば。多少若作りはできて、もうやつても歳をとつていくのです。生まれたときから「死ぬ身をもって生まれ

て」きてしまったのです。要するに死ぬということも、事件や事故にあうことも、歳を取っていくことも、嫌な人に出会うことも、好きな人と別れなければならぬことも、すべて不条理なのだというのが私たちの実態です。

不条理とは納得できないこと、努力が間に合わないこと。これが私たちの身が表している事実です。偽り、偽装とは、あたかも理想が本当の私のように勘違いさせることが「偽装」です。だますことです。がんばったらどうにかなるところ（イメージの自己）が真実だと思うのです。

比較する生き方 いのちの差別

私が哀しいなと思うのは、命まで努力によつて操作できると思っているという問題に臓器移植があります。他者の命を終えさせて、心臓が動いている間に取り換え、別の人の命を長引かせるということを世間では善しとしています。仏教者の中にもそれが慈悲だと思っている人はいっぱいいます。そうでしょうか？ 仏教は人間の日常の価値

観で、命まで操作することを善しと言っていないとは思いますが。

当然命を操作しようとするれば、Aさんの命と私の命どっちが上かと優劣がつけられます。これは他者と比較する生き方ですから、そこに差別がうまれます。勉強のできる人が上で、世間という役に立たない、寝たきりの老人の命は差し上げなくてはならない命になるのでしょうか？ 世間の求める価値観のなかで生きるといふのはそういうことです。

何カ所かの病棟を廻つてカウンセリングをしています。末期癌の患者さんや、長期療養型の病気で入院している患者さんは、ほとんどの人が「私は存在していたら、人に迷惑をかけるだけだ。もう役に立たない。だから殺してほしい」といふのです。私が生きていくだけで家族の重荷になっていくから、自分の命を働き盛りの人の命と比較をして「こんな私の命は無い方がいいのだ」といつているわけです。

命の差別が出てきています。全部こちら（偽り・理想や概念の側）の価値観だからです。妄、偽、虚、これで生

きていたらすべてそうなるてしまします。臨終が近付くと、私はもう世の中の役に立てなくなつた、だから駄目なのだといふ。果たしてそうでしょうか。誰でも呼吸してくれているだけでいいのではないだろうか。今健康な人もみんな最期は価値がないことになってしまします。だって人間は必ず死ぬのですから。

世間の価値観はいつも比較ですから流動的です。多分、世の中が変わつたら、或いは、時代が変わつたら、理想というものも簡単に変わるんです。変化するようなのは真理でも何でもありません。不条理だけれども、立ち止まつて真実の身をよく見ようということ

私を写し出す鏡

では、私たちがここに気付くにはどうすればいいか。それには鏡が必要なのです。本当の自分ってなんだつたのだらう。どう生きていきたかつたのだらう、と立ち止まるきっかけになるのは努力が間に合わない、努力が破られ

たとき、要するに自分にとって都合が悪
いことがおこったときに、初めて私
たちははつと立ち止まるわけです。

しかし、立ち止まっても鏡になるよ
うな、自分を写すものがないと意味が
ありません。ちよつと待ってごらん、
一回立ち止まって自分のことをよく反
芻してみようよ。元に返って思い返し
てみてごらんという鏡の役目を世間で
はカウンセラーや医者がします。

鏡はあり



のままを写すといいま
すが、そう
ではなく真
逆を写しま
す。鏡の中
の私が右手を上げていたら反対になる。
自動的に脳がそのように読むのでしよ
うか、その姿を見て少し違うのだけれ
ど受け入れるのです。鏡に映したとき
に逆を写しているが「ああ、これが私
だったか」と気付くことがあります。

ちよつと待ちなさいよって、本当に
あなたはそうなの？と。一心不乱に理
想とか概念の、事実ではない「偽り」「虚

妄想の「妄」で理想を目指して邁進し
て生きていくときに「ちよつと待って、
このまま行って大丈夫か」と鏡が間に
入ることがとても大事です。理想のイ
メージは真実ではないのです。

仏教で教えを聞くということとは自分
の姿を写しだすと言うことです。仏法
を聞く機会、聞法会が鏡の役を果たし
てくれます。

経教は鏡の如し

お経の内容は、科学や知識がたくさ
ん頭に入っている私たちには信じられ
ない不思議なことが記されています。
本当に？信じられない！ということが
多いと思います。でもそれが鏡像の役
割です。ちよつと日常とは違う世界を
ここに写し、一回立ち止まってみなさ
いというわけです。

浄土真宗で大切にしているお経に、
阿弥陀さんのいらつしやる浄土のこと
が書かれている『仏説阿弥陀経』があ
ります。その中のほんの一部を紹介し
ます。

地中蓮華、大如車輪。青色青光、

黄色黄光、赤色赤光、白色白光。

微妙香潔。舍利弗、極樂国土、成就如是

功德莊嚴（仏説阿弥陀経 漢訳文）

阿弥陀の浄土には大きな池があつて、
そこに咲く蓮の花は車輪のように大き
いのです。その車輪のように大きい蓮
の花は、青色青光ですから、青色の蓮
の花は、青く光輝いて、青い陰を持ち、
黄色黄光、黄色の蓮華は黄色く光輝い
て、黄色の陰影を持ち、赤色赤光、赤
い蓮華は赤く光輝いて、赤い陰影を持
ち、白色白光、白い蓮の花は白く光輝
いて白い陰を持ち、微妙香潔、穏やか
な香りがただよい、美しい佇まいがあ
つてということでしょうか。舍利弗よ、
極樂国土、阿弥陀さんのいらつしやる
お浄土は、成就如是、功德莊嚴、この
ような功德で飾られていて、このよう
に完成されている、と書かれています。

※舍利弗（シャリープトラ）お釈迦様のお弟子の名。

功德とはなにか

功德というとはどんなものを想像しますか、どんな功德を求めていますか？ 初詣をしたりするときの功德とは何でしょう。「いやなことが自分に起こりませんように」、死ぬのはみんな分かっているんだけど「理想の年齢までは呆けずに、病気にならず納得できる歳になつたら死にたい」と、そういう功德を求めていませんか。そういうのが世間でいう功德ですよ。お墓参りも理想の方向にしていますか。実は聞法もそうなつてしまっていないですか？ 聞法の場合に何を求めていますか？ 理想の功德を求めているのではないのでしょうか。お寺にお参りに行けば、何かいいことがあるのではないかと考えてはいませんか。すべて理想の側。それが私たちの、世間の功德ですよ。

でも『阿弥陀経』にこれが功德だと書かれているのは違いますよ。青蓮花は青く光って、しかも青い陰を持っている。白い花は白い、赤い花は赤い。これが功德だと言っているんです。これが完成されている世界。こちら（身

の事実、現実の自己）の方に目を向けなさいと示してくれているのです。青色青光という教えは、私たち人間でいえば性格とか、生き方とか、考え方で色が出ます、みんな色を持っています。日常の用語で言えば個性、偏り、特徴です。



先ほどの譬えのように、親はその子どもに対して、私の思うこういう人にならなさいというわけです。例えば「赤い子」（例えば前向きで、活発で、積極的で、頑張れる子というイメージ）が私の理想で大好きな子供だとすれば「赤い子になれ」というわけです。私の大好きな赤い子になりなさいって求めるわけです。世間の方向で生きていくということは、本当の自分じゃないのに、努力して頑張つて変えようと、努力をして応えようとします。

あなたはあなたのままでよい
あなたはあなたにならばよい

でも、阿弥陀経が教えている世界はそうではないと言っています。あなたにはあなたでいいですと言っているわけです。「赤い子」が「赤い子」として育てばいいんです。しかもその「赤い子」は影の部分があつていいといっているんです。私の好きでない「白い子」であつてもいい、私と考えが違つても、生き方、感じ方が違つてもあなたはあなたでいいですよといっているのです。

それも明るいところなど、いいところばかりではない、日常的に世間という善人じゃなくて悪の部分、闇を持っているあなたでもいいと言っているのです。

それが鏡となつて立ちほだかつてくれたお経が表していることです。鏡像の役目、不思議な世界を写し出すことによつて、事実の私に気付かせ、立ち止まらせてくれるのです。西光寺さんでも勉強会があると聞いているので、お経を学ぶときがあると思いますが、「よし！そこに自分を写して照らし出してみよう」と、今度からそういうふうに法話を聞いてみて下さい。こつち方向（妄・偽・虚）にしか行けなかつ

た自分が、事実に向かって行けるかもしれない。

死ぬ身をもって生まれた「私」

私は妄想だとわかっているのに、まだ死なないだろうと、何の根拠もなく思っています。なので今日できることを今日しないわけです。明日の為に我慢したり、明日があるから、今日やめとくわけですね。じゃあ明日はあるんですか？それはわからないでしょう。臨終はあと1時間後かもしれないが、そう本当に思っていないの。妄想しているのです。皆さんなんとなく自分の死ぬ時期を妄想していませんか？臨終のときに初めて、あつ、本当に不条理だったのだなと気づくのです。私も今日1日くらいは大丈夫だろうとどこかで思っている。だからのうのうと安心して生きているが、その安心は本物かと言えば「偽」なのです。何の根拠もないのですから。

実際に、末期癌の患者をサポートしていた若者の方が先に亡くなったというところが身近にありました。それが事

実です。病気で死ぬのではない。事故で死ぬのではない。死ぬ身をもって生まれてしまったから死ぬのです。努力などなんも間に合わない世界を私たちは生きていくという事実を気づかせてもらおう、それが事実の世界の生き方です。私たちは方向が逆なのです。

そのために必要な鏡、それが教え、お経です。そして時々法話の場て言い当てられ、ああ、妄想で生きていく私だなーと立ち止まって、また日常に流されて世間で生きていくんです。実はこれがまさに凡夫の生き方なのです。「わかっちゃいるけど、やめられない、止まらない」んです。何をやっても世間の方向に行ってしまうんです。

凡夫Ⅱ自分を知らない者

凡夫というのは自分のことを知らない人のことです。私は何者かを知らない人のことを凡夫というのです。じゃあ、私ってどんな人か。教えに書かれていることかというと、三つの深い毒、言いかえれば三つの煩惱を持っているのを凡夫といいます。煩惱とは自分を

苦しめ煩わせるもので、その一番目は「貪欲」(とんよく)です。100点取れば次の欲が出、勝つたら次の欲が出る。欲には終わりはない。負けたら余計勝とうと思う。全部他者との比較で、これは日常なので誰にでもあります。

2つ目に「瞋恚」(しんに)。これも他者との比較です。人と比較して生きていくので人をうらやましがる。負けたら人が羨ましいのです。「自分はだめなんだ」とか「こんな私じゃだめなんだ」など、羨ましくて、そこに先ほどの欲がからみまますから「蹴落としてやろう」と怒りが出てくる。なんであの人があんない生活をして、こんな(世間の)努力をしている私が今の状態なのか、と。他者との比較で羨んだり蹴落とそうとしたり怒りが出てくる。

そしてその結果3つ目の毒「愚痴」(ぐち)がボロボロ出てくる。悔しいとか、悲しいとか、なんで?どうして私だけが?と、思わず愚痴が出てしまうんです。要するに私たちはこの3つの欲から離れられずに、しかもこれを垂れ流しながら生きていくことに気づけないのです。人のことは見えるのですよ、

「欲深い奴だな、怒ってばかりいる嫌な奴だな、愚痴ばかりこぼして」と。

煩惱・毒が完成されているので私たちのなかから抜け出せない、そのことを知らない。しかも、離れられないということを分かっているのを凡夫と知っているわけです。凡夫を聖者にしようなどとは教えのどこにも書かれていないのです。



たとえば、犯罪を犯した人を正義に立って糾弾することなどできません。たまたま犯罪を犯さないという機縁、縁があつたからやらないで済んでいるだけで、条件さえそろえばいつ犯罪を犯

してしまふかわからない存在です。

それが本当にわかっているれば、高見に立って人のことを糾弾できなくなります。申し訳ないと頭を下げて生きていくしかないが、それができない。

私たちはいつでも正義に立つのです。自分もそうでした、凡夫である私が凡夫である皆さんにお話ししているだけです。

天命に安んじて人事を尽くす

日常の価値観だと、努力、頑張ることがよいことなので「人事を尽くして天命を待つ」ということを善しとしています。人事を尽くすという努力。そして、天命を待つ。天命：神仏の判定です。よいとか、だめとか価値判断が下される。この生き方は世間ではいい生き方といわれますが、結果にいつも怯えながら生きていくことです。頑張るって努力をして、結果は神仏に判断される安心できない生き方です。

努力が足りない、もつと頑張らなくてはとなる。これにつけ込むのが危ない宗教で、占い、霊感商法みなそうで

す。「努力がたりない」「信心がたりないからこうなった」もつと、もつとという方向です。つまり結果が怖いのです。自分の人生に悪いことが起こると「努力が足りなかった」「納めるものが不足していた」と簡単に騙されるのです。なら、いっぱいお金を出したら、いい結果が出るのだろうか？出せると思ひ込むわけです、妄想ですね。何百万も払って、では最終的に不条理なことが起こらない身になれるかどうか。そんなことは絶対にはないですよ。遇うべきときには事故に遇い、死ぬべき時には死ぬんです。何も変わらない。生死の問題は「私」というものを超えている。

明治に西洋の学問にも応え得る近代学問を明らかにした大谷大学の初代学長、清澤満之（きよざわ まんし）が、これを世間と逆の方向に「天命に安んじて人事を尽くす」と言い換えました。なぜなら結果は決まっているから。事故にあつたり、年をとつたり、死ぬことが決まっているのだから、不条理な身を、不条理な世間を生きているのだから、もう結果はお任せしましょうと。

いのちはいつ生まれたり、いつ死ぬかというのには私たちの手を離れているのです。天命に任されていることであつて、何も自由は許されていないのです、私たちが



は。しかし、すでに天命が与え

られてあるのだから、その中で限度のある、毒だらけの凡夫としての人事を尽くさせてもらおうと言い換えたのです。だから恐れるものが何もなくなくなつた。今やれることを凡夫の私としてやりましょう。そうするとビクビクしない生き方ができるのです。

偽りに向かつていく生き方を、真実に目覚めなさいと方向を変えてくれた言い換えだと私は思うんです。どうでしょう。理想追求、幸せ追求、一般で言う現世利益追求の生き方を改めていくということは。

最近、おバカキャラといわれる人たちの番組が多く、私も大笑いして見えますが、そのおバカな答えを見ていると、少なくともあの人たちより私は頭

がいいと比較しているのです。あれを見ているとき物凄く満足感を得ているのです。良くできています。凡夫の私をくすぐるんです。勝つた!と思うんです。勝ち負けでだれも見えていないのに、無意識に、あいつらよりは勝つて

いると、満足感を得るという自分にこの前気付きました。今度テレビを見て自分の満足感がくすぐられるのを感じてみてください。どっちの方向を今生きてたかなーと、一回立ち止まって見てほしい。そしてなるべく法話が聞ける場所、また聞けなくても、ちよつと立ち止まってみようかな、何か気づいたときとか、自分の人生に嫌なことが起こつたとき、立ち止まらざるをえなくなつた時に、お寺の本堂に入つて座り、「私つて何で立ち止まつているのだろう」「何の必要があつてこういう嫌な不条理なことが起こつているのだろうか」と、ここで(本堂自分を感じ取つてみてください。それがこういう場所、ここが鏡の役をするから。どこにでも鏡はあります、その気になれば。

お墓参りもそう。亡くなった人は鏡になつてくれています。「お母さん、今の

私の生き方どうだろう?」と。霊が云々ではなく、今の私はこれでいいのだろうか、自分を写し出す鏡になつてもらつてください。そういう気持ちでお墓参りも今後してみてください。どこにでもある鏡をいい意味で利用してもらいたいと思います。



熱心に三橋先生の法話を聞くご門徒の皆さん